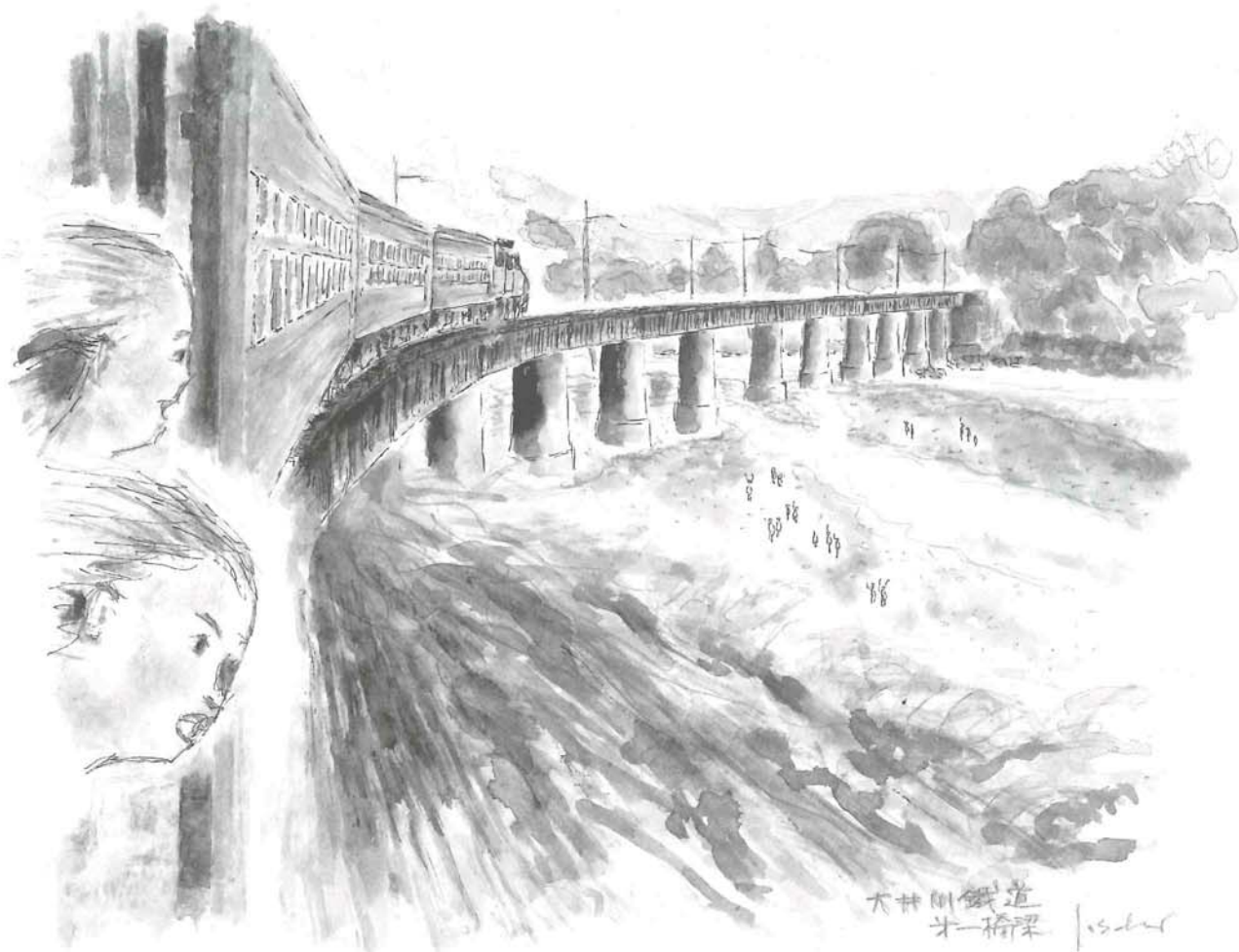


会報 河川文化

第91号
令和2年9月



Contents

巻頭言

地域協働で「水の都・三島」の魅力的な水辺環境を再生

渡辺 豊博

特集「静岡の川」

「シリーズ／河川文化を語る」

江戸時代の狩野川の渡しと舟運

橋本 敬之

湧水からなる柿田川

下山 義夫

島田宿と大井川の川越制度

朝比奈 太郎

静岡市巴川の景観と産業

曾根 辰雄

足久保川と静岡茶発祥の歴史

丹羽 登美子

天竜川

金原 利幸

子どもが安全に遊ぶ川作り

山田 辰美

浜名湖今昔

荒熊 元茂

落語と川② 「矢橋船」

竹内 宏

万葉の川⑨ 明日香川(飛鳥川)

井上 克彦

プライイチ

歴史と地形から愛知を知る

川瀬 功記

川の眺めを守る人々

吉橋 久美子

会員の活動紹介

彩の川研究会令和元年度現地調査会

中野 毅

第23回日本水大賞2021日本ストックホルム青少年水大賞

31

第22回日本水大賞・日本ストックホルム青少年水大賞の表彰について

30

28

26

24

23

22

20

18

16

14

12

10

8

4

2

地域協働で 「水の都・三島」の 魅力的な 水辺環境を再生



渡辺 豊博

NPO 法人グラウンドワーク三島専務理事

水辺環境の再生からスタート

東京オリンピックが開催された1964年以降「水の都・三島」の水辺環境の悪化が進行し、富士山からの湧水が流れる、かつての清流・河川にはゴミが捨てられ、街の「宝物」である河川が、街の「恥」に変身していききました。この危機的な水辺環境の悪化を改善すべく、ふるさとの原風景・原自然の再生を願う三島っ子が集まり、1992年に「グラウンドワーク三島」が結成されました。その組織づくりの手法は革新的でした。1990年頃、英国を発祥地として先進的な環境改善運動として高い評価を得ていた「グラウンドワーク」の手法を日本で最初に三島に導入しました。バラバラな市民団体を一体化し、まず8つの市民団体が参集し（現在20団体）、地域協働による市民主導の実践的な活動に取り組んでいきました。

最初に手がけたのが、ドブ川化した「源兵衛川」の水辺環境の再生でした。当時「地域住民は川を汚す原因者、市民は行政と政治への依存と甘え、行政は言い訳ばかり、企業は利益優先、市民団体はバラバラ」であり、地域を構成する主体者の利害や思想が、複雑に

絡み合い解決の糸口が見つからない閉塞状態でした。驚くことに、源兵衛川が余りにも汚れて臭いので暗渠化し埋めてしまう計画までもが検討されていました。そこで、グラウンドワーク三島は、この閉塞状態を打開すべく、多様なアプローチを開始しました。まず「議論よりアクション」を信条として、1992年より3年間にわたり、毎週土曜日に市民有志が中心となり、定期的な河川清掃に着手しました。



ゴミが捨てられ汚れた源兵衛川

また、水辺自然観察会の開催、源兵衛川を愛する会・三島ホテルの会など様々な環境改善団体の設立、自然環境調査の実施、東京の人々を対象とした水辺ゴミ拾いツアーの企画、環境モニタリング調査の実施など、市民の発意に基づいたユニークで多彩な仕掛けを連続的に企画を実施していきました。

さらに、行政との連携により、農林水産省の補助事業である「源兵衛川親水緑道計画」を事業化し、グラウンドワーク三島が利害者の調整・仲介役となり、市民参加の計画策定を進め、3年間に約180回以上もの検討会を開催し、その結果、源兵衛川の原因風景・原自然を目的とした自然度の高い水辺再生が実現しました。今では、夏になると子供たちの歓声が水辺にこだまし、源兵衛川は絶好の川遊び・魚取りの場になっています。清流に棲むホトケドジョウやサワガニも増え、5月には2000匹ものゲンジホテルが水面を乱舞し、三島から消滅した三島梅花藻も復活して白い可憐な花々が水中で咲いています。この水辺環境の再生プロセスが、市民の川への愛着心とまちづくりへの問題意識を高め、子どもたちの川に対する関心を高め、自然好きの子どもたちを育成していきました。

なお、源兵衛川は国際かんがい排水委員会より、歴史的な農業用水路としての価値と役割が認められ、2016年11月8日「世界かんがい施設遺産」に、また、地域協働による市民主導の運営管理システムが認められ、2018年1月11日「世界水遺産」にダブル登録されました。三島の宝物が世界の宝物にランクアップされたのです。河川を守り、伝えていくための試行錯誤のプロセスと実績、ノウハウが、世界的に評価された「証」だと考えています。

成功への3つのステップ

第1のステップは、「実践の継続と成果の蓄積」です。「右手にスコップ・左手に缶ビール」を合言葉として、環境悪化の現場において実践的・具体的な市民活動を展開しました。その運営手法は、さまざまな地域主体者同士が徹底的に話し合い、地域の課題を明確化し、行政や政治に一方的に依存しない、自立的・主体的な



松毛川での放置竹林の伐採作業



地域協働による源兵衛川での清掃活動



地域協働により清流が蘇った源兵衛川

解決方策を考えることによって、政策立案と事業実現の能力向上を図り、独自の「市民力」と「地域力」を高めていくことにあります。

第2のステップは、「パートナーシップの形成」です。市民・NPO・行政・企業が有機的・一体的に関わり合う、新たな地域協働の仕組みを構築しないと、グラウンドワークの活動とはいえません。

グラウンドワーク三島は、課題を抱えた地域・町内に入り込み、最新の地域情報の収集・整理・分析・評価を行い、解決のための具体的な処方箋を見出だしていきます。まずは、地縁団体・町内会との信頼関係の構築を重視し、数多くの説明会を重ね、地域住民の共有意識と一体感の育成を仕掛けていきました。その後、行政へのアプローチを進め、関係部局との意思疎通を行い、行政内部での事業内容の理解度と支援体制の構築を進めました。また、地域企業には、資材、機材、資金、技術、人的支援などの無理の無い支援を依頼しました。利害関係者の得意技や利点を最大限に出し合える効率的な地域協働のシステムを創りあげていくことが、調整・仲介役としてのグラウンドワーク三島の主要な役割と立場です。

第3のステップは、「市民団体間のネットワークの構築」です。グラウンドワーク三島の組織体としての特徴は、組織と人材の多様な力量が発揮できる「ネットワーク組織」を形成していることにあります。前提として参加団体の個々の運営には干渉しない、それぞれの組織の特徴を活かせるまちづくりプロジェクトへの参加機会を提供（資材、施工機械、設計作業、ボランティア提供）、小規模会員団体への事務局機能の支援（経理、連絡、会議運営、調整、助言）など共存共栄・相互補完の仕組みづくりが組織の強固な基盤になっています。

多様な現場モデルを蓄積して 「水と緑のネットワーク」を創造

地域での課題は複雑多岐にわたります。グラウンドワーク三島は、それらの地域課題に着実に取り組み、活動開始から28年が経過した今、市内各所に点在する実践地は70箇所にも及びます。

また、市内に広域的な「水と緑のネットワーク」を創造すべく「松毛川千年の森づくり」では、放置竹林

の伐採や河畔林の植樹を行い、新たなサンクチャリー・生き物たちの楽園を整備しています。「境川・清住緑地」では、富士山からの湧水・水柱を見せる「大湧水公園」の企画調整と境川でのミチゲーション工法による多自然型川づくりを県内で最初に実現しました。

他にも、三島梅花藻の里の整備、ホテルの里づくり、歴史的な井戸・水神さん・湧水池の再生、学校ビオトープの建設、御殿川の水辺緑道の整備による源兵衛川との回遊路づくり、耕作放棄地を活用した三島そばや三島米の復活、空き店舗を活用した三島街中カフェの運営など、その取り組みは、水辺再生から農業再生、環境コミュニティビジネスへと展開し、創意工夫にあふれ独創的です。

水辺再生から地域再生へと発展

現在、源兵衛川や三島梅花藻の里などを中心に三島市内に点在する多様な「水の仕掛け」を訪れるまち歩きの観光客は増え、観光交流客数174万人(1991年)が786万人(2016年)と4.5倍になっています。

グラウンドワーク三島による小さな環境改善地区の「点」が、源兵衛川と回遊道路の「線」で連結されて、「面」に広がり、「水の都・三島」の潜在的な魅力を誘発し、鯉を中心とした食文化の開拓との相乗効果と重なり、ゆったりとした気分が水辺環境を散策・堪能できる、心とらぐまちと河川環境を創り上げています。

新型コロナウイルスの感染拡大が取まらない社会情勢の中で、人が集中して危険な「密」にならない、豊かな水辺環境に恵まれた「疎」のまちづくりが実現しています。

水辺再生から始まった活動が、多くの関係者の知恵と行動を有機的に結合・融合して、今、地域再生・観光振興・コロナ後への取り組みへと発展しています。三島の今を見学に来てください。

Profile

静岡県職員として農業基盤整備事業の計画実施に携わる。生活・文化部初代NPO推進室長などを経て、2008年4月より都留文科大学教授。2016年4月より同特任教授。富士山学や市民活動論、地域環境計画ゼミなどを開講している。グラウンドワーク三島をはじめとする9つのNPO法人の専務局長職を歴任。地域づくりや水辺再生をしかける「まちづくりプロデューサー」の役割を全国に先駆けて先導している。著書に「清流の街がよみがえった」「先生、NPOって儲かりますか?」「富士山の光と影」などがある。